



ヴァイオリン・レッスン・ルーム

巨匠の伝言

第69回

アーティキュレーション
シマノフスキ：夜想曲とタランテラ⑤

ヴァイオリニスト
日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター **木野 雅之**

URL : <http://www.masakino.com/>



アーティキュレーション

楽譜をよく見ると、音そのものに付随しているいろいろとニュアンス（表情）記号が付いていることが多いのに気が付いているだろうか。

演奏をするということは多種多様な音を出すわけでそれにはいろいろな方法で音色を出せなければならない。そしてその為の指示がある場合は、はっきりとそのような表現をつけることが大切である。

例えばドット（点）が音の上に付いている場合は、はっきりとスタッカートかスピッカートとして弾くわけで、どちらの場合でも前後の音とつながってはいけない。

よく聞いてみよう。しばしば見受けられることだが、しっかりと弓を止めないためかテヌートと変わらない音になってしまっていないだろうか？

人にはそれぞれ生まれ育った環境、言葉、考え方、性格があり、演奏をする上でそれらは密

接な関係にあることはおそらく誰もが自覚し、又、さけては通れない事実である。言い換えれば自分が演奏をするということは、すなわち自分がそのように歌いたいという気持ちと一体なわけである。又、別の言い方をすれば自分が歌いたい気持ちがないと演奏するという事は非常に難しい、ということである。

さて、テクニク的な場面ではしっかりと弓をコントロールし、ありとあらゆる奏法にいつでも対応できるよう日頃から練習しよう。弓を持ち上げる、すなわちひとつひとつをはっきりと分けて弾くことは英語でリフトと言うが、こうしたことは言葉と密接に関係している。ヨーロッパ音楽には必ず忘れてはならない。テヌートは音ひとつひとつは切れるものの完全には切りすぎないなど十分神経を使って、その違いははっきりと作ること。結論は自分の出している音をよく聴くことである。

カロル・シマノフスキ Karol Szymanowski (1882~1937) ポーランド
夜想曲とタランテラ Nokturn i Tarantela Op.28

近年、ポーランドを代表する作曲家。R・シュトラウスやスクリャーピン等のロシア音楽や印象派の影響を受け、第一次世界大戦後は新古典主義に進んだ。

毒蜘蛛、タランチュラに刺され、暴れ苦しむ様子から、その名のついたタランテラは、ナポリの熱狂的な舞曲である。「夜想曲とタランテラ」は、1914年に作曲された。この作品は彼のイタリア旅行の影響が反映された名作である。